
ラストバレンタイン

夏乃市

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストバレンタイン

【Nコード】

N7972M

【作者名】

夏乃市

【あらすじ】

死の床につく父。それを見守る母。幼馴染のふたりが歩んだバレンタインデーの軌跡は、どのような結末をむかえるのか。

【バレンタインデー】

〔聖バレンタインは269年頃殉教死したローマの司祭〕 2月14日。聖バレンタインの記念日。この日に愛する人に「特に女性から男性に」贈り物をする。日本では1958年頃より流行。【岩波書店『広辞苑』より】

2026年2月13日 金曜日

「おそらく今晚が山だと思われます。ご親戚の方々にご連絡を。それから、いつ意識が戻るかわかりませんので、可能な限りおそばにいてあげてください」

医師の事務的な言葉に夫がぎこちなくうなづく。

私は古びたアドレス帳を夫に手渡した。うすうす予感があったのだ。今日家を出るとき、電話台の脇から鞆に入れてきていた。

「じゃあ、ちょっと行ってくるよ」

「よろしくね」

夫は携帯電話を取りだして、それからここが病院だったことを思い出し、あわてて財布を確認し始めた。

私は自分の準備の良さにちょっと嫌気がさしつつ、十円玉の詰まった小銭入れを夫へと渡す。

夫の足音が病室の外へと消えると、私は父のベッド脇に座った母に声をかけた。

「お母さん。明日は2月14日よ」

1961年2月14日 火曜日

「あきこ、今日なんの日か知ってるか？」

玄関を出た私に、待ち構えていたように春雄がまくし立てた。春雄はお隣さんで、三歳年下の男の子だ。

「朝はまず、おはようでしょう？ それから呼び捨てにするな。秋子お姉様」

「なにがお姉様だよ、おとおおんな！」

「で、今日がなんだって？」

「だーかーらー、今日が何の日だか知ってるか？ って話だよ」
「さーてねー」

知っているも何もない。今日は聖バレンタインデーだ。数年前から、女の子が好きな男の子にチョココレートをプレゼントする日ということになったらしい。テレビでも雑誌でもその話題で持ちきり。もちろん、中学の私のクラスも同様だ。

何を隠そう、私の鞆の中にもチョココレートがひと箱入っている。ひとつもあげないのでは時代に乗り遅れる気がして、ちょっとだけ懂れている先輩にあげてみようと思っているのだ。

「なんだよ、知らねえのかよ。今日はバレンタインデーだ」

「バレンタインデーでしょ？」

「なんだ知ってんじゃない」

「もちろん。それがどうかしたの？」

「あきこ、オレにチョコくれよ」

なるほど。小学五年生の春雄は、お菓子がもらえる日だと思ったのか。

「あんたね、バレンタインデーにチョコをあげるってことの意味、わかってるの？」

「あいのこくはくだろ？」

棒読みだ。思わず苦笑してしまった。

「それじゃあ、私があんたにチョコをあげる義理はないでしょ？」
「ぎり？」

「そ、義理」

「でも、オレはあきこがすきだぞ」

「そ、ありがと。もっと春雄が大きくなって、ステキな男性になったら考えてあげるわ」

だだをこねるかと思った春雄が、意外にも落ち込んだ顔をしたことに驚いた。

「……ってやる」

「え？」

「ステキなおとこになってやるから覚えてろよ！」

春雄は大声で叫ぶと駆けだした。

ここは住宅街の一角で、通勤通学途中のひとつたちがくすくすと笑っている。まあ、微笑ましいと思っているのだろうけれど。

「覚えてろよ……か」

ま、覚えておくだけでも覚えておきますか。

それよりも、今の問題は先輩にどうやってチョコを渡すか、だ。競争率高そうだしなあ。

1964年2月14日 金曜日

気がつくと夜の10時を回っていた。

2月の屋外はとてつもなく寒い。自宅の門の前に立つこと4時間。正直——だいぶ挫けかけている。

「春雄、何突っ立ってるの？」

はっと我に返ると、秋子が隣の家の門をくぐろうとしていた。

「お、お帰り。遅かったな、秋子」

「だから呼び捨てにするな。それから、私がどこで何しようと勝手にしょ」

そのひと言が色々な想像をかき立てる。いくら高校生でも、部活がこんな時間までかかるはずはない。

「今日はバレンタインデーだな」

「そうね。あ、そうか。あんた女の子がチョコレート持ってきてくれるのを待っているのね？」

にひひひ、と秋子が下品な笑い声をあげる。

「なに、お目当ての子でもいるの？　でも、さすがにこの時間じゃもうこないでしょう。あきらめなさいな」

「まだわからないよ」

「そう？　風邪ひかないようにね」

「ちょっと待って」

俺は、門から玄関に向かおうとしていた秋子の腕をつかんだ。

「何よ？」

「まだわからないって。だって、俺が待っていたのはお前だ」

「え？」

「秋子、俺はお前が好きだ。ずっと好きだった。つきあって……」

ぱんっ！　と乾いた音が住宅街に響き渡った。

「……え？」

「中学生のガキが、自分の気持ちだけ押しつけるな！」

そこで初めて、俺は秋子の目が腫れていることに気づいた。凍えきっていると思っていた体から、さらに血の気がひく。

「お前……泣いて」

ぐっ、と表情が崩れかけた秋子は、鞆の中を勢いよく漁ると、綺麗にラッピングされた小さな箱を取り出して、勢いよく地面に叩きつけた。くしゃっ、という意外に軽い音がする。

「……誰だよ、相手。いつか言ってた部活の先輩か？　くそっ、受け取るぐらいしねえのかよ！　そいつの家教えろ。俺が渡してきて……」

「バカ！　それが独りよがりだって言ってるの」

「……」

「ほっ」といって。ああ、それ良かったら食べちゃっていいわ。箱つぶれちゃったけど手作りなんだ」

秋子が玄関の奥へと消えた後には、俺と潰れたチョコレートの箱が残された。

俺は箱を秋子の家のポストに入れると、その場を後にした。ちらちらと白い雪が降り始めていた。

1968年2月14日 水曜日

「あら、久しぶりじゃない。元気？」

『ああ。今年は受験生だから風邪なんてひいてらんないしな』

バレンタインデーの朝にかかってきた電話は、幼なじみの春雄からだった。短大に進学して東京に出てきて以来、随分とご無沙汰している。

「それにしても、朝の7時15分とは絶妙な時間ね」

『まあね。夜は色々と予定があると思ってね』

なるほど。春雄なりに気を遣ったわけだ。学校へ出かけるにはまだ15分ほど時間がある。

「で、大学はどこ受験するか決めたの？」

『ああ。国立はT大学に挑戦する。私立はKとWかな』

「ちよっと凄いいじゃない。国立K大学とかN大学なんて選択肢はないの？」

『東京じゃないと意味がないんだ』

「……ああ、それってもしかして……」

『わかる？』

「わかりたくないなあ」

『わかってんじゃん。秋子と同じ東京に行きたいんだよ』

「でも、私は短大だからもう卒業するんだけど」

とはいえ、就職は都内の中小電機メーカーの事務職に決まっている。春雄がそれを知らないはずがない。

『なあ、今年も俺はチョコレートもらえないの？』

「そう言えばあげたことなかったわね」

『なんだよ無自覚かよ』

「ま、幼なじみなんてそんなもんよ」

春雄は必ずバレンタインデーには私にアプローチをしてくる。飽きもせず、懲りもせず、毎年、毎年。

『7年前のバレンタインデー覚えてるか？』

「素敵な男になってやるから覚えてろよ事件？」

あの後、春雄のことが近所で話題になり、私も随分と気恥ずかしい思いをさせられた。考えてみれば、あれが私を意固地にしているのかも知れない。

『良い大学に入るのが素敵な男の証とは思わないけどさ、T大学に入れたらつきあってくれないか？』

「私に恋人がいたらどうするの？」

『俺と比べてみる』

「……」

私は電話口で絶句し、それから死ぬほど笑った。最後の方は腹筋が引きつって息が漏れるだけだった。

「そろそろ学校に行かなくちゃ。受験がんばってね」

『おい、答えは？』

「いいよ。T大学に受かったらつきあってあげる」

私はすんなりそう言うのと、軽く受話器を置いた。

「おっと、これを忘れちゃならんね」

テーブルの上に置かれたチョコレートの箱を鞆に突っ込むと、私は軽やかな足取りでアパートを飛び出した。

1976年2月14日 土曜日

「どうしたの？ なんだか今日は心ここにあらずよ」

喫茶店の向かいの席で秋子が言った。

そんなことないよ、と言いながら、俺は自分のコートのポケットが気になってしょうがない。俗に言う給料の三ヶ月分。清水の舞台から飛び降りる気持ちっていうのを実感している。

俺と秋子は、つきあい始めてそろそろ7年になろうとしている。幼なじみで、小学五年生のバレンタインデーに告白してから（秋子は告白だとは思っていないようだ）かれこれ15年近くたつ。

大学受験に際して、T大学に合格したらつきあってもいいという約束を取り付けた時点で、俺は自信满满だった。学力に自信はあったし、大学を卒業したら即結婚を申し込むつもりでいた。

しかし、俺が大学受験をした1969年、国立T大学では大学紛争が激化していた。Y講堂攻防戦と言われる事件の後、その年の入学試験は中止になってしまったのだ。

結果、俺は私立K大学に入ることになったのだが、国立と私立では学費が雲泥の差である。一般中流家庭だったわが家では、私立大学の学費を全額払ってなどもらえず、アルバイトと奨学金を頼りに大学生活を送ることとなった。

そんなこんなで、就職した俺は、まず奨学金の返済から行わなければならなくなったのだ。

「ひとつ訊いて良い？」

「ん？」

「秋子はなんで俺とつきあってくれたの？」

T大学合格はできなかったのに。

「なに？ 不満があるの？」

「まさか。ふと思っただけ。今日はバレンタインデーだからね」

「ああ、そうね」

秋子は周囲を見渡した。喫茶店のあちこちのテーブルでチョコレートやりとりが交わされている。

「私が短大二年生だったときのバレンタインに電話くれたでしょ？ あのとときの自信満々の春雄のままだったら、たぶんつきあってなかったと思う」

秋子が俺の目を悪戯っぽく覗き込んだ。

「落ち込んでる春雄には私が必要なんじゃないかって思ったのよ」

——ああ、そうだ。

俺はずっと秋子の存在を頼りに生きてきた。

秋子はずっと俺の道しるべだったんだ。

「ねえ、俺はチョコレートもらえないの？」

「欲しいの？ あれは告白の道具であって、つきあっている私たちには関係ないでしょ？」

「その意見にはちよつと賛同しかねるけれど、でもまあ、今日はそれで良しとしよう」

「？」

俺は横に置いたコートのポケットから小さな箱を取り出した。

「これからもずっと、二人でバレンタインデーを過ごしたい」

指輪の小さな輝きに負けない輝きが、秋子の瞳から溢れた。

1987年2月14日 土曜日

「ママはなんでパパにチョコレートあげないの？」

土曜日の午後。スーパーのお菓子売り場で9歳になる娘が唐突にそう言った。

今や小学生でもチョコレートのやりとりは当然のように行われるらしく、今朝は娘も気合いをいれて登校していった。結果はまんざらでもなかったらしく、鼻歌交じりで帰ってきたものだった。

「うーん、特に理由はないかな」

「えー、パパかわいそうだよ」

「そうかしら」

思い返してみれば、初めて旦那にチョコレートをくれとせがまれたのは、彼が娘くらいの歳の頃だった。かれこれ25年近くになる。毎年かならず旦那からは何らかのアプローチがあり、結果的にチョコ

コをあげないままきてしまった。考えてみれば、よくそれで済んできたものである。

スーパーのお菓子売り場には、バレンタインデー当日の今日も、チョココレート売り場が大々的に展開されている。これから買って帰る人も多いようだ。

娘は小さな自分の財布を手にチョココレート売り場をうろうろしたあげく、小さな箱を手にして戻ってきた。

「これ、パパにあげようと思うの」

「あら、パパ喜ぶわ」

「でね、ママからってことにしようかと思うんだけど……」

なんとまあ、娘は娘なりにいろいろ考えているらしい。

私は通路の端によると、娘の視線にあわせてしゃがみ込んだ。

「ねえ夏希、例えば同級生のヒロ君にね、お母さんが夏希からですってチョココレートをあげたらどう？」

「うーん、ちよつといや」

「なんで？」

「よくわかんない」

「じゃあ逆ね。ホワイトデーに、ヒロ君のお母さんが夏希にキャンディーを持ってきたら？」

「いや」

「どうして？」

「……ヒロ君から欲しい」

「贈り物はね、本人から直接もらうのが一番嬉しいのよ。だから、パパにあげるチョココレートは夏希からのチョココレートね」

「うん。でも……」

「だーいじょうぶ。ママはパパのことが大好きよ」

「本当？」

「ほんとほんと。チョココレートを簡単にあげられないくらい好き」
わー、と娘が万歳をした。どうやらそれが心配だったらしい。

「ほら、お会計して帰ろう。パパが待ってるわ」

「うん」

私はチョコレート売り場を見た。25年。今更簡単にチョコレートはあげられない。これは意地悪でもなく、意固地でもない。言うなれば、これが二人のバレンタインデーのスタイルなのだ。

ふと思う。今後、私が旦那にチョコレートをあげることはあるだろうか、と。

それはもう、今生の別れの時しかないような気がした。

2000年2月14日 月曜日

「お父さん、待って待って」

駅の改札を抜けたところで娘に声をかけられた。どうやら同じ電車だったらしいが気がつかなかった。

「今帰るか。随分と遅いんだな」

「バレンタインデーだからね。彼氏と晩ご飯食べてきちゃった」

「そうか」

昔と比べると随分とあっけらかんとした物言いである。とはいえ、秋子も昔からさばけたところがあつたから、そこは母親譲りといったところか。

「はい、バレンタインデーのチョコレート」

娘から手渡されたのは、某有名洋菓子店の包みだった。

「ありがとう。高かっただろう」

「まあね。感謝して食べてね」

「ゆっくり食べるよ」

「部長さんともなると一杯もらうの？」

娘は私が下げている紙袋に気づいたらしい。

「義理チョコってやつさ。おおっぴらにご機嫌をとれる機会だからな」

「あ、そんなこと言って。義理チョコって贈る方も大変なんだよ」

「そうなのか？」

「うちのサークルでもそう。誰にあげるとかあげないとか、女子一同頭つきあわせるの。後で揉めないように」

「そんなものか？」

「女はめんどくさいのよ」

したり顔で話す娘の横顔を見ながら、この子もそんなに大きくなったのかと感慨がこみ上げる。結婚すると言い出すのも時間の問題だろう。

「ねえ、まだお母さんからチョコレートもらえないの？」

「ん？ そうだな。もらったことないな」

「でも私知ってるよ？」

「何を？」

「お父さんが、毎年お母さんにおねだりしているの」

「おねだりってなあ」

——今年もチョコレートはもらえないのかい？

——私たちの間にそれは必要ないでしょ？

こんな会話が、もう何十年も繰り返されている。

「お母さんもちよっと意固地になっているのかなあ」

「違うよ」

「え？」

「お母さんはちゃんと毎年考えてくれている。あげるかあげないか考えて、それで結論を出してくれてるんだ」

「えー？ 本当？」

「本当だとも。だからさ、もらっちゃうと終わってしまう気がするんだよ」

「終わるってなにが？」

「いや、なんだろうな」

「ふーん。それはそれで夫婦のありかたってやつなのか」

夫婦の間には言わずもがなの決めごとがいくつもある。私たちのバレンタインデーもそのひとつだ。年に一回必ず交わされる決まり切ったやりとり。それが、お互いの絆を確かめ合う儀式なのだ。だから、私が妻からチョコレートを貰うのは、きっと今生の別れのときなのだろう。

2026年2月14日 土曜日

意識の混濁が続いていた父が、未明に奇跡的に目を覚ました。おそらく、これが最後だろうと私は覚悟する。

父は傍らで手を握っている私を見た。そして、かすれるような声で言った。

「……今日は何日だ」

「2月14日……バレンタインデーよ、お父さん」

「そうか……」

父は微かに首を動かすと、傍らにじっと座る母を見た。

「母さん……」

「なんですか？ お父さん」

「今年も、チョコはもらえないのかな？」

私は息をのんだ。

今まで、一度も母からのチョコレートをもらうことができなかった父。そして、一度もチョコレートをあげてこなかった母。

でも、今日が最後だ。

母の手には、私が用意したチョコレートの包みがある。

聞いたところでは、父が母に最初にチョコレートをねだったのは65年も前の話だ。それから飽きることなく、ふたりは「欲しい」

「あげない」を繰り返し返してきた。

そうだ。ここで母がチョコレートをあげれば、父は満足して旅立つことができる。

母が65年間もったい付けてきたチョコレート。それは、父の人生に悔いを残させないためだったんじゃないかとすら思えてくる。

「お母さん」

わたしは小さな声で母を促した。

母はじつと父の顔を見ていた。

ゆっくりとその頬に手をやり、耳元に顔を近づける。

そして、ひと言ひと言、区切るように言った。

「お父さん。私たちの間にそれはいらないでしょ？」

《ラストバレンタイン 了》

(後書き)

初出 2009年 同人誌「エー文芸第3号」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7972m/>

ラストバレンタイン

2010年10月8日13時58分発行